西川一三「秘境西域八年の潜行」を描いた沢木耕太郎「天路の旅人」

(その1)

八柳 修之

私は 80 の壁を越えたころから、皆さんのペースについて歩けなくなった。歩かなければ歩けなくなるという言葉を恐れて、東海道をはじめ五街道バーチャルウォークの記録帖を作成し、毎日、2~3 kmだが歩くようにしている。またボケも恐ろしい言葉である。防止になるかは分からないが、長い距離を歩いた人の本を読み、それを要約するという作業を課し、恥ずかしくもなく HP に掲載してもらっている。

HP 掲載はイザベラバードの「日本奥地紀行」以降、ストップしていた。昨年9月、西川一三著の「秘境西域 八年の潜行」(芙蓉書房)を図書館で見つけ読んだが、期限内に読み切れず途中で挫折してしまった。

西域・チベットは今でも知られざる地域、ロマンを感じる地域である。高校時代、多田等観の講演を聞いて 西域にはある種の憧憬をいだいていた。多田道灌は大正年間、チベットのセラ寺に留学すること 12 年、ラマ教、 チベット語の研究にダライラマから最高の僧侶の地位を与えられた人である。

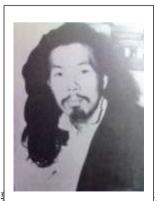
西川一三(かずみ)は西域・チベットに入った僧侶たちとは違って、この地域を調査する大日本帝国の密偵 (スパイ)であった。



再び、西川の西域の八年を読んでみたいと思ったのは、昨年 10 月、西川をモデルに新潮社から出版された沢木耕太郎の「天路の旅人」(新潮社、574 頁にわたる大著) 図書館に申し込んだら 20 人待ちということであったので、今回は購入することにした。沢木耕太郎は私の好きな作者でもあったからだ。沢木は西川の旅そのものではなく、その旅をした西川一三という稀有な旅人を描きたかったと述べている。 西川は昭和 25 年にカルカッタから帰国し、「秘境西域八年の潜行」を書き上げると、その後は静かに盛岡で美容・理容用品卸売店主として元旦以外は朝 9 時から夕方 5 時

1月 10 日、NHK クローズアップ現代で、滅多に TV に出ることがない沢木耕太郎は桑子アナとの対談で西川の生き方に感銘したことを述べていた。ご覧になられた方も多いとおもいますが、ユーチューブで見ることが出来ます。

まで働き、静かに人生を全うした生き方に感銘したと沢木は言っている。



西川一三、1918年、山口県に生まれる。1936年、福岡県立中学修猷館(名門進学校)卒業。満鉄大連本社に入社し、安東、天津、包頭、大同に勤務。1941年満鉄を退社し、張家口の駐蒙古大使館が主宰する興亜義塾(特務要員養成機関)に入塾した。動機について西川は「シナの西北民族を制する者は全シナを制す。新疆省を制する者はアジアを制する。これは西北民族の包囲圏をもってシナを攻略するという一大政策であり、蒙古族、チベット族を友とする漢民族を包囲する体制をつくり上げることこそ、シナ事変解決のであったのである。私はこの西北の辺境に挺身したいという熱望を抑えることが出来なくなっていた」と述べている。

型 、西域の地理、歴史、政治経済、軍事訓練を受け、1943 年卒業、卒業出来たのは半数の 13 人であった。卒業と同時に蒙古大使館調査部勤務となり、「西北支那に潜入し、支那四境民族の友となり 永住せよ」という東条英機総理の命令書と支度金6,000円を与えられた。特務員養成の背景には満州、蒙古、トルキスタン、チベットを結び中国を背後から包囲する「ツラン民族国」構想があったとされる。

以下、つたない要約で沢木さんに真意が伝わっていないと怒られるかもしれませんが、ウォーカーが関心のある西川の行程を中心に要約します。歩いた所の地名は帝国書院の「基本地図」には記載のない所ばかりですが、地図を開きながら読んでいただければよいかと思います。また、少しでもイメージを膨らますために無料画像を挿入しましたが、これとて西川が見た風景とは違っています。

沢木さんが本当に伝えたかったのは西川の心のうち、旅を進めるにつれてその心の変化だと思います。 西川同様、沢木耕太郎の温かい心が、その旅の節々で伝わってきます。それは「天路の旅人」を読んで下さい。

出発・トクミン廟からタール寺まで



1943年(昭18)10月、西川は日本の戸籍を抹消されロブサンボー(チベット語で美しい心)と名を変え、当時拠点としていた奥地のトクミン廟をラマ僧に扮し出発した。同行者は三川(サンチョン)ラマと呼ばれる三人の僧侶と少年、トクミン廟から故郷の青海省に戻るところだった。

西川の持ち物は駱駝2頭、銀貨150両、アヘン80両、蒙古服2枚、シャツ・ズボン各2枚、テント1張り、羊肉、メリケン粉などの食糧。張家口を出発しゴビ砂漠に潜入することになる。

それから8年、蒙古・支那軍の第一線を突破してから寧夏、甘粛 の砂漠を横切り、西海の高原地帯をさまよい、チベット、西康の

山岳によじ登り、霊峰ヒマラヤを越えること 7 度、インド遍歴を経て 8 年目、インドで逮捕され、1950 年(昭和 25 年)6月13日、カルカッタより帰国した。この 8 年間、西川はどのくらいの距離を歩いただろうか、関心があるところである。西川は「山野に草枕し、どのくらい歩いたであろうか。何キロくらいだろうか。1 万キロか、否、2 万キロ近いことだろう」と述べている。



(出典:無料画像、以下同じ)

西川の一年前、西北に向けて出発した興亜義塾の一年先輩に木村肥佐生がいた。木村は蒙古人夫婦と5頭の 駱駝で出発していた。木村はこの夫婦と最後まで旅をしたが、西川は5回同行者を変えている。理由は同行者 にスパイの容疑がかからないためだと西川は言っている。木村とはラッサで出会い一時行動を共にするが先に 逮捕され木村の密告で西川の旅は終わり、木村と共に1950年(昭和25年)6月、日本に送還された。

さて、西川だが、当時拠点としていた奥地のトクミン廟を出発したが、最初の同行者はオールズという $52\sim3$ 才の男を頭に 2 人の男とオーズルが買い取った少年、いずれも三川ラマ(サンチョン、チベット人とモンゴル人の混血)と呼ばれる男たちであった。彼らは故郷の青海省へ戻るところで国境を越えた**定遠営**まで連れて行ってくれることになった。西川を日本人であることは知ってのことであったが、決して口外することはなかった。駱駝を識別するには困ったり、駱駝の糞(アルガル 燃料になる)の中にアヘンや記録を隠し入れたりして駱駝を引きながら歩けること一か月、寒気身にしむ果てしない草原を渡って、砂漠の街、寧夏省**定遠営**にたどりついた。20 日間の予定であったが、雪のため 1 ヶ月近くかかった。雪は人や家畜の歩いた跡を消し雪原になってしまうからだ。また中国軍の監視に見つかることを避けて夜も歩いた。そしてついに国境を越え中国軍の監視の眼が届かないゴビ砂漠に出た。ゴビ砂漠は旅の難所ではある。昼間に行動し夜に野営するのが普通の旅だった。





定遠営



バロン廊

定遠営は砂漠オアシスであり甘粛や青海へ向かう隊商路が通っている。オールズの縁故で**バロン廟**の僧舎に世話になった。天然痘が流行していてオールズが連れて来た少年が死に風葬にした。

1994年(昭和19)4月、オーズルらと別れることになった。一人になった西川はこの廟でどう生きていくか。毎日薪拾い、すべての雑用を引きうけた。やがてバロン廟ではロブサンは口数が少なく骨惜しみせず働く気のいい奴だ、という評判が立つようになった。さらに蒙古語の読み書きが出来るらしいという評判がたち廟の書記の仕事をしないかと誘われたが、廟に永くとどまることになるので断った。バロン廟のラマ僧たちにとって、青海省西寧にあるタール寺に参詣することは夢だった。西川も行って見たいと思った。半月ほどの距離であるが、デングリ砂漠横断と大通河の渡河とデンクリ峠越には同行者が必要であった。



テングリ砂漠



大通河

9月に入りおもいがけない誘いが舞い込んで来た。ニマーいう蒙古人のラマ僧からであった。ニマーはこの地方に産する天然のソーダを青海地方の西寧まで運んで売りたいと思っていたからだ。西川はとにかく西寧に行きたかった。駝夫という動物相手の仕事なら身分がばれないと思った。9月下旬、ニマーと3人の駝夫と共に16頭の駱駝を連れて出発、途中、駝夫の縁者が加わり10人、駱駝は50頭になり「隊商」の形態をなすようになった。テングリ砂漠は小山ほどもある砂丘の連続、太陽の角度と勘だけ進む。徒歩で越えると大蔵経をすべて読む以上の功徳があるといわれ最後まで歩き通した。定遠営から6日目にして寧夏省から甘粛省に入った。州境地帯は不毛の地、治安の悪さで知られている所であったが幸い匪賊に遭わなかった。農耕地帯を過ぎると、崩れかけた万里の長城だった。やがて黄河に注ぐ荘浪河を渡ると日本軍が「援蒋ルートとよぶ「西北公路」、この道は陝西省の西安から蘭州、粛州、安西、さらに新疆省のウルムチからソ連領内まで延びるルート「赤色ルート」で蒋介石の中華民国政府に大量の軍事物資を流れをストップさせたい道、かってのシルクロードでもあった。西北公路を北上し蘭州と西寧を結ぶ蘭西公路に向かう間道へ入った。道はチーリエン山脈の山峡を通過すると定遠営から西寧に至る難所の一つ川幅200mの大通河、三つ目の難所と言われる海抜3,000mのテングリ峠、甘粛省と青海省との州境、雪道となった。西寧に着き30㎞くらいでラマ教徒の聖地である青海省のタール寺に着いた。10月、ニーマー等は目的を果たし故郷に帰った。



タール寺



チーリエン山脈

それから西川はどうしたか。タール寺は中国各地から人が集まるので情報を入手しやすいので、しばらく留まることにした。西川は一人きりでラマ僧として振る舞う自信がなかったので、多くの巡礼者とにし同じ日々、午前中叩頭をする生活を送ることで中国各地からの情報が労せず入ってくるようになった。

西川はタール寺で暮らしているうちにチベットのラサへ行ってみたいという気持ちが確固になっていた。

蒙古のラマ教徒にとって、回教徒のメッカと同じく、巡礼したいと願っている究極の土地であった。

西川は無意識のうちに密偵としての任務とは別に、自分の知らないところへ行きたい、見てみたという情熱に強くとらわれるようになっていた。当時チベットは依然として鎖国状態を続けていた。それまでラサに入った日本人は1901年(明治34)に河口彗海、寺本婉雅、成田安輝、矢島保治郎、青木文教、多田等観、野元甚蔵の七人、西からの陸路をとった。青海ルートをとったには寺本(僧侶)と矢島だけである。中国側からだと広大な無人地帯や、険しい山岳地帯を多く越えていかなければならず、時間や費用も、それに危険度も高かった。だが、蒙古人の巡礼者は東の中国側からラサに向かうことになる。(つづく)